特別入試導入や後期日程廃止などの入試制度改革によって教育改革を加速させ独創的な大学を目指す

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴田, 正良, 岩見, 雅史, Shibata, Masayoshi, Iwami, Masafumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00056170

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

Part 2

特別入試導入や後期日程廃止などの入試制度改革によって教育改革を加速させ独創的な大学をめざす

金沢大学

柴田正良 副学長

金沢大学は、人材育成のための独自の教育方針「金沢大学<グローバル>スタンダード」（KUGS）を2014年度に策定した。KUGSは、共通教育、学士課程、大学院課程の教育の全てを貫く基本方針だ。この基本方針に従って、2016年度から約300科目あった共通教育科目を整理・集約するなど着実な教育改革が進んでいる。そして、その改革は入試制度にも及ぶ。

中でも2021年度入試から導入される「KUGS特別入試」は、高大接続プログラムへの参加を前提とした金沢大学独自の入試方式だ。KUGSに基づく教育改革と「KUGS特別入試」を中心に、柴田正良 副学長（教育担当理事）と岩見雅史 高大接続コア・センター長（学長補佐）にお話をうかがった。

金沢大学が育成する人材像を示すKUGS

KUGSは、現在のような社会の大きな変革期に、リーダーとして多くの課題に立ち向かっていくことができる人材を育成するための基本方針であり、2014年度に策定された。柴田正良副学長は「KUGSは、金沢大学憲章で掲げる教育目標を実現するため、金沢大学が育成する人材の具体的な姿を提示したものです」と話す。

KUGSが示すスタンダードは次のように5つある（注1）。

スタンダード1：自己の立ち位置を知る
科学的世界観、批判的思考力、歴史的洞察力、地政学的洞察力、規範意識

スタンダード2：自己を知り、自己を鍛える
フィロソフィー、アイデンティティ、健康増進、心身の成長、克己

スタンダード3：考え・価値観を表現する
論理的構成力、物語力、言語表現力、感情表出力、創造的形象力

スタンダード4：世界とつながる
共感・歴史観、日本文化・金沢文化理解、異文化理解、国際関係の理解、国際コミュニケーション力

スタンダード5：未来の課題に取り組む
想像力・創造力、情報分析力、総合的判断力、蓋然性、持続可能性

KUGSは、共通教育、学士課程、大学院課程の教育の全てを貫く基本方針となっており、教育改革もこの基本方針に従って行われている。2016年度には、約300科目だった共通教育科目を、5つのスタンダードで整理・集約し、30の共通教育のGS科目とするなど、人材育成の基盤となるカリキュラム改革もKUGSに基づいて行われている。

多岐にわたる入試制度改革の背景には現状の大学序列化への強い危機感

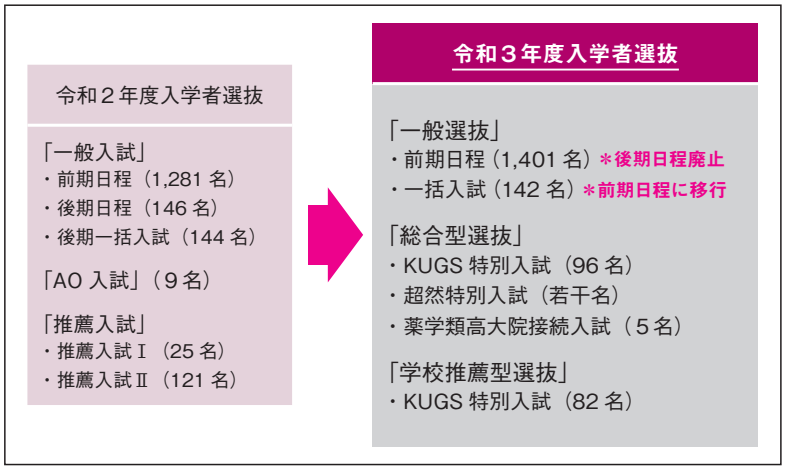
こうした教育改革を進める金沢大学だが、入試制度もKUGSに基づいて改革を進めている。柴田副学長は「入試の『在り方』を変えることで、大学の『かたち』を変えていきます」と話す。具体的には、金沢大学独自の価値観とスキルを重視する入試を行うことで、これまでとは入学者の質を変えることをめざしている。「入学者の質や心意気を変えることに挑戦しています。学生が変われば大学は変わります。そのために入試は非常に重要です。KUGSは大学全体のアドミッション・ポリシー（以下、AP）とも言えます。そのKUGSが目標としている人材になろうとする高い志と強い気概を持った入学者を期待しています」（柴田副学長）

金沢大学が教育改革とともに入試改革に力を入れてい

（注1）KUGSの詳しい解説は、https://www.kanazawa-u.ac.jp/education/distinctive/global/kugskaisetsuを参照。

るのは、現状の日本の大学序列化への強い危機感があるからだ。「日本の大学は、さまざまな意味で、東京大学を頂点とした富士山型の序列構造になっています。しかし、富士山型では、各大学は同じような取り組みをしているだけで、これは非常に脆弱な仕組みです。各大学それぞれが強みと個性を持ち、私が八ヶ岳型と呼ぶように多くの峰がある、いわば多峰型の高等教育の構造を作ることが必要です」と話し、各大学が群雄割拠で競い合う環境が日本の高等教育の発展には必要だと言う。そして「八ヶ岳型の中の１つとして、金沢大学も名乗りを上げたい」と意欲を見せる。

＜図表１＞金沢大学 2021 年度入試概要（予定）



＊後期日程廃止に伴い、一括入試が前期日程に移行。帰国子女、国際バカロレアおよび私費外国人留学生入試は引き続き実施。現時点での人員。
詳細は大学のホームページ・入学者選抜に関する要項をご覧ください。

後期日程を廃止
個別試験で独自性と優位性を際立たせる

入試制度の大きな改革は 2021 年度入試から実施される＜図表１＞。１つは、**後期日程の廃止**だ。後期日程を廃止することについて、柴田副学長は「後期日程は受験機会の拡大のために設定されていますが、現実には偏差値の上位大学の併願先としての役割を果たしています。これでは富士山型序列の徹底になっているだけと言わざるをえません。我々は、金沢大学こそ第一志望という学生を多様な形で受け入れたいと考えています」と話す。なお、現在は後期日程で行われている、学ぶ内容や所属する学類を入学後に決めることができる**一括入試は前期日程に移行**する。

そして、入試制度改革で今後の鍵となるのは、個別試験だと柴田副学長は言う。「金沢大学の独自の入試方式を作り、そこで独自性、優位性を際立たせることが必要です。従来の序列化からの離脱を可能とするような“物差し”は、個別試験しかありません」と説明する。柴田副学長は、これまでは知識の記憶とその再生を主眼とする試験方式という単一の「物差し」が、あたかも大学全体の実力を測るかのような誤解と序列化を生んでしまっていたが、本来は多様な評価軸があってもよいはずだと考えている。そのため、他の「物差し」を独自に開発し、それによって金沢大学の独自性を際立たせ、さらに入学者の多様性も確保したいとの考えだ。

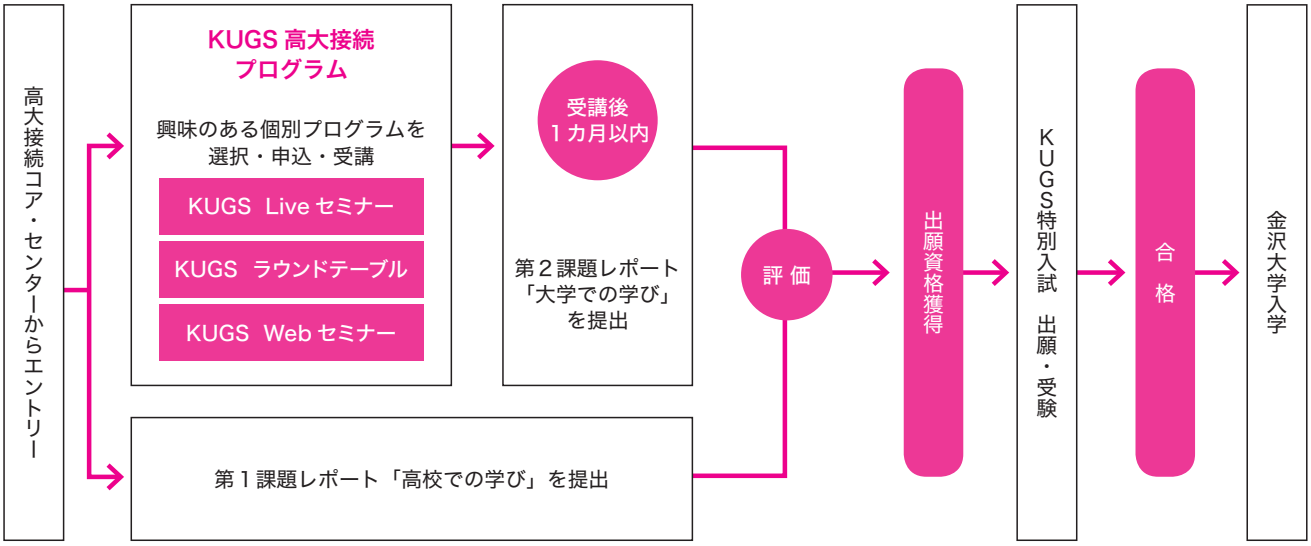
さらに 2021 年度入試では、**個別試験を 60％以上の配点比率とする方針**だ。この配点比率を徐々に上げて、いずれは大学入学共通テスト（以下、共通テスト）を資格試験化することも視野に入れている。

また、「入試の方式と内容は、ＡＰから導出されるべきです。そして、入試問題はＡＰを体現したものであるべきです」とＡＰと入試との整合性を重視し、「ＡＰを基盤にした、これまでとは異なる独自の“物差し”を社会に提供したい。例えば、『総合科目』などの独自の新しい受験科目を課すことなどを検討しています。金沢大学独自の“物差し”が社会に受け入れられることは、金沢大学の人材育成の考え方が社会から評価されることでもあり、金沢大学ブランドの確立にもつながります」と話し、KUGS に基づいて磨きをかけた人材を社会に送り出すとともに、日本の高等教育を多峰型の構造に転換していく意義を熱く語る。

高大接続プログラムへの参加が必須の
KUGS 特別入試

さらに 2021 年度入試から、新しく始まる方式が**KUGS 特別入試**だ。これは、一般入試では測ることが難しい受験生の資質・能力を、時間をかけて見極めるための多面的・総合的な評価を行う入試といえる。KUGS 特別入試に出願するためには、金沢大学が提供する「KUGS 高大接続プログラム」を受講して、提示された課題に対してレポート等を提出し、評価を受ける必要が

＜図表２＞ KUGS 特別入試　出願資格獲得から入試までの流れ



（金沢大学の新特別入試パンフレットより）

ある＜図表２＞。

「KUGS 高大接続プログラム」は、対面参加型の Live セミナー、ラウンドテーブルと Web 視聴型の Web セミナーの３つがある。高校生は、複数あるプログラムの中から、興味・関心に応じて、自由に選択して受講する。プログラムは人文社会科学系から、理工系、医薬保健系など幅広い分野が通年で開講されている。また、Web セミナーは、金沢大学のサイト上で公開されているため、場所を選ばず、いつでも受講が可能となっている。

入試自体は 2021 年度入試から実施されるが、「KUGS 高大接続プログラム」は既に始まっている。これについては「入試の年度になってから、一気に複数のプログラムを作ることは難しいため、十分な準備期間を取っています。入試に関わることなのでプログラムを担当する先生方とも綿密な打ち合わせ・準備が必要です」（柴田副学長）と学内の協力を得ながら丁寧に進めていると話す。

また、高校生が複数回参加できる仕組みについて、岩見雅史 高大接続コア・センター長（以下、センター長）は「我々は育成型の入試をめざしています。どのプログラムを受けても、そこで基準を満たせば KUGS 特別入試の出願要件を満たしたことになります。できるだけいろいろな種類のプログラムを用意して、高校時代に幅広く学んでもらい、それぞれでレポートを提出してもらいたいと考えています」と話す。

生徒が提出したレポートは、高大接続コア・センターで評価を行い、コメントを付けて受講者にフィードバックする。場合によっては再提出を指示することもあるそうだ。岩見センター長は「高校生と大学が連携し、そのつながりの中で高校生が成長して、視野を広げ、学びの幅も広げて、しかも深めてもらいたいと考えています。そのため、高校１年生、２年生の時から参加してもらいたいと思います」と「KUGS 高大接続プログラム」が特別入試のためだけではなく、まさに高大接続の役割を持つと話す。

柴田副学長も「できるだけ多くの高校生に幅広く受けてもらい、金沢大学のさまざまな特色を知ってもらいたい。オープンキャンパスでは伝えきれない、研究の深みや先生方の人柄に触れて、じっくりと進路選択をしてもらいたい」と高校生と大学のコミュニケーションを大切にしているプログラムであることを強調する。

高校生が提出する課題レポートは KUGS の５つのスタンダードによるルーブリックで評価

各学域・学類などが提供するプログラムは、それぞれの専門性を背景にしているが、高校生が提出する課題レポートでは専門的な知識等は求めていない。岩見センター長は「プログラムの概要や、そこで何を学び、何を課題として感じたか、今後その課題とどのように向き合っていくのか、といった内容で 1,000 字から 1,400 字で記入してもらいます。専門的な知識などをレポートで求

＜図表３＞ KUGS 高大接続プログラム 課題レポート 評価基準（一部抜粋）

KUGS	レベル４	レベル５
A．自己の立ち位置を知る能力	倫理観と科学的知見に基づく視野から自己の位置や使命を把握できている。	高度な倫理観と科学的知見に基づく広く深い視野から自己の位置や使命を把握できている。
B．自己を知り、自己を鍛える能力	自己の能力を認識し、将来の目標を明確化して、目標実現に向けて努力することができている。	自己の能力を客観的に認識し、将来の目標を明確化して、目標実現に向けて十分に努力することができている。
C．考え・価値観を表現する能力	自身の考えや価値観を論理的に構成して表現し、他者に伝える力がある。	自身の考えや価値観を論理的に構成して明確に表現し、的確に他者に伝える力がある。
D．世界とつながる能力	自身の持つ文化への関心を持つとともに異文化を理解し、異文化の人々と共生・共存する意欲をもっている。	自身の持つ文化を理解するとともに異文化を理解し、異文化の人々と共生・共存する能力を持っている。
E．未来の課題に取り組んでいく能力	広い視野から総合的に未来を予測し、未来の課題に取り組んでいく意欲をもっている。	広い視野から総合的に未来を予測し、未来の課題に取り組んでいく能力をもっている。

※レベルは１～５まであり、４、５のみを抜粋して掲載。　（KUGS 高大接続プログラム 課題レポート 評価基準より）

めているわけではありません。ルーブリック＜図表３＞を基に評価経験が豊かな高大接続コア・センターの担当者が、客観的な立場で評価することができる仕組みになっています」と話す。課題レポートを評価する基準などのルーブリックは、KUGS の５つのスタンダードに基づいて作成されている。また、高大接続コア・センターのホームページでも公表されている。

高校生が提出するレポートは課題レポート「大学での学び」に加えて「高校での学び」レポートもある。岩見センター長は「高校生は日頃、部活動や学習活動などでさまざまな経験をしていると思います。そこでの学びについても書いてもらいます。２つのレポートを複数名で評価し、基準を満たした場合に修了認定証を出して、それをもって出願資格としています。高大接続という観点からも『高校での学び』と『大学での学び』の両方が必要です」と話す。

柴田副学長も「高校の時に経験したさまざまな学びをどのように特別入試に組み込めばよいのか、今後も工夫をしていきたい」と継続的な改善を考えている。

なお、KUGS 特別入試には、「総合型選抜Ⅰ」「総合型選抜Ⅱ」「学校推薦型選抜Ⅰ」「学校推薦型選抜Ⅱ」の４つの選抜があり、Ⅰは共通テストを課さない特別入試、Ⅱは共通テストを課す特別入試だ（注２）。口述試験も行われる予定で、柴田副学長は「口述試験の配点を高めていけば、従来の入学者層とは異なった層になると思います。この特別入試で入学した学生には、大学生活のさまざまな場面で他の学生をリードするような存在になってもらいたい」と新しい入試制度に期待を寄せる。

ところで、2021 年度入試からは、さらに特異な才能を評価する**「超然（ちょうぜん）特別入試」**も行われる。超然特別入試は共通テストを課さない特別入試であり、**「A-lympiad（エーリンピアード）選抜」**と**「超然文学選抜」**の２つがある。金沢大学が主催する数学コンテスト（日本数学 A-lympiad）と文学コンテスト（超然文学賞）で入賞実績があり、出願要件を満たす場合は出願資格が与えられる。詳細は大学のホームページをご覧いただきたい。

入試改革と教育改革が関連
成績評価の改革にも全学的に取り組む

金沢大学では、授業科目の成績評価の改革にも取り組んでいる。柴田副学長は「ペーパーテストやグループ討論などについて、評価方法、基準、比率などを定めてルーブリックに基づいて成績評価を行います。これは大学の成績評価に対する社会の信頼を得るためです。本来は学生の能力をどれだけ伸ばすことができたかが大学の教育力の１つの指標となりえますが、それを主張するためには厳格な成績評価を行う必要があります」と各科目の成績評価を、基準を明確化したルーブリックによって行うことの意義を説く。また、「入試を変えて、よい学生が入学したとしても、旧態依然とした授業では意味がありません。アクティブ・ラーニングを全ての授業で行い、学生に活きた能力やスキルを身につけさせたい」（柴田副学長）と入試と大学教育の改革がリンクしていると語る。

独自の入試の開発を通じて、大学の在り方も変えるという金沢大学の挑戦は、表面的な公平性や客観性を重視し、１点刻みの評価をしやすい入試方式にとらわれた、従来の入試に対する考え方への挑戦でもある。

（注２）KUGS 特別入試の詳細は、https://www.kanazawa-u.ac.jp/examination/event/koudai を参照。